

# エディトリアル

---

地域医療振興協会 顧問 北村 聖

「月刊地域医学」を手に取り、このページを開いている諸氏にとっては、地域医療は医療全体の中でも重要な位置を占めることは自明のことと理解されていると思う。したがって、地域医療を教えるということ、すなわち地域医療教育も極めて重要なことと認識されている。しかし、多くの人はこの地域医療教育が非常に難しいと感じているのも事実である。何をどう教えればよいのかが分からない。

地域医療教育の課題を少し整理して考えてみる。

①地域医療の教育はいつから始めるのが良いのか？平成16年に新しい研修制度が導入されたときにはじめて、すべての研修医が2年目に1ヵ月以上の地域医療研修を受けることが定められた。裏返せば、それまでは、研修医も、医学生も地域医療の教育を必ずしも受けてはいなかった。自治医大を除けば、選択科目で地域医療実習があればまだましな方で、診療所実習そのものがなかった。卒前教育のガイドラインである医学教育モデル・コア・カリキュラムにおいても地域医療が必修となったのは平成28年度版からと記憶している。現在の考えによればすべての学生に医学部入学後速やかに地域医療の教育を始めて、6年間、さらに臨床研修の2年間を加え、継続的に教育をするのが理想と考える。

②地域医療教育の目的・到達目標は何であろうか？決してすべての人が地域で働くことを求めているわけではない。平成28年度版のコア・カリキュラムでは「地域社会で求められる保健・医療・福祉・介護等の活動を通して地域医療と地域包括ケアシステムを一体的に構築することの必要性・重要性を学ぶ。」とされている。「理解する」といった認知的目標ではなく「学ぶこと」といった統合的能力が目標となっているのが特徴である。

③最も悩ましい課題は教育方法・方略であると考え。臨床実習で診療所や小規模病院に配属されたときに、どんな方法で何を学ぶかが課題となる。正解というものはなく、その地域特性と教員・学生の熱意などの相互作用あるいは化学反応で教育が醸成されると思う。今月号の特集の意義がここにある。どんな場所でどのような地域医療教育が醸成されているかを紹介してもらった。いろいろな形で教育実践が行われ、種々の評価が実施されている。基本は診療参加型臨床実習で、教員と学生とのinteractionで学びの場が構成される。どの実習においても刺激的でワクワクする医学教育が紹介されている。